



で吸収しようとする懸念な毎日だったが、そんな頃、S監督という、撮影所きつてのウルサ型で、戦前派の監督の、ドン尻助監督をつとめることになった。S監督は、水産講習所（現水産大学）出身の、船乗りの経験もある、モダンで頑健で、しかも、監督中随一のカンシヤク持ちで、手の早いでも有名な人物だった。撮影現場で「ミシン・カモン」と絶叫されたので、新米助監督が、シンガー・ミシンを持参したら、張り倒されたというエピソードがあった。ミシンとは、マシーン、即ち機械、カメラのことだと、後でスタッフの一人が教えてくれたそうだが、当時は、並みいるスタッフも新人には敵しく、知っていても、何も教えてくれない時代でもあった。「スタン・バイ」、「ゴー・ヘイ」と怒鳴りまくる監督さんで、助監督をカメラのパン棒でぶ殴るなど朝飯前、手がふさがってれば、足で蹴っ飛ばすという過激な監督で鳴り響いていた。

現われたのかS監督が私を指さし、「桂木君（作曲家黛敏郎夫人、桂木洋子さん）のメトフ……持って来い」と怒鳴っている。返事が第一と、徹底的に仕込まれていた新人助監督としては、取り敢えず大声で、「ハイ！」と答えて、その部屋を飛び出した。飛び出したものの、ハタと困った。「メトフ……」というのがわからない。たしか「メトック」とか「メトツフ」と聞こえたのだが……。さー、未だ嘗て聞いたことがない。やたらに英語を使う監督だから、これはきつと英語に違いない。然しそんな単語は知らないし、大体英語は余り勉強しなかったから自信がない。急いで辞書を探して引いてみる。メトフ、メトック、M、A、I、いや、M、E、メテイオロジイ気象学。駄目。いくら頁を引っくり返しても、メトック、メトツフ、類似した音声の単語がない。

困り果てて、手近な先輩に恐る恐る聞いてみる。非常に不機嫌な顔で、知らないとおっしゃる。では、ともう一人の先輩に当たってみる。「そんなことぐらいい自分で調べろ。たしか図書室に岡倉の英和がある筈だ。コンサイスなんぞで間に合わず精神がいけない。」と説諭された。然しもう時間もないので、殴られる覚悟で、衣裳部屋へ出頭した。私「メトフ、どうしてもみつかりません。」監督「なに、見つからない？（衣裳掛に）こんな若造じゃラチがあかない。衣裳屋、お前さん、一寸見て来てくれ」と、怒鳴りまくった。幸い、ゲンコツは頂戴しないで済んで、ホッとした。さて、衣裳屋さんが持って来たモノは……「メトフ……？」とは、何だったんだろうか。——女の洋服です。洋式婦人服、嗚呼。樋田先生の語典によると、女唐服、婦人服を意味する開化語。外国人に対する「毛唐」という呼び方は、あまり聞かれなくなった。「女唐」「女唐服」にいたっては、すでに死語といってもよい。——と書かれている。女の唐人の服、それで、M、T、I、フク。今では死語だが、昭和二十年代でも、もう死語だったと思われる。然し、そんな明治の開化語も使われ、また、他の世界の方々には、理解に苦しむ変な言葉の多かった活動屋の世界。そんな中で過ごした青春の時代を、炬燵の中でしみじみ想い出して、なつかしんだ新春であった。